



古今
大

子
子
子

三



古今奇談英草紙第三卷

⑤ 紀任重法洞より浄教と断る語

世の中事何れも天命り難き事あり一命の程はあり事あり
 求むして自願りむる命の程はなきは精神と号して是を
 ひとと知る事あり一命あり難して是れ法海と云ふ事あり
 果して此世の宿業因縁ありやと福り多しと懐く一箇の
 子法安年中後宇多帝の時より紀の任をあるものあり
 物語として一月二十日と懐り此の任をあるものあり
 桑の膏糖と格の國の風ありを初秋の夜も又懐く此の
 いづきの朝りつたるを明徳の時士より懐く此の
 世より家養て能く親を切りにて断れ任を成長りしりて
 世の家養となく刀の事ありとあるは法海も自決りぬと

古今奇談英草紙第三卷

自みゆり身よ縁と折れども囊とともく誰美人の目よえきり
 徹始人ありと近隣乃尊ひりりそ本殺所業の徹始もあか
 賜り身りて終よ口腹り充ふはらう虹らどた吐息おんれも
 窮りし屈せだひささう困窮く書と漢と漢家の能きと授そ
 目を送る厚り大具感ありておそあう高村小條家の横隈と之
 うのよわらへん命令改し事終あるまうと心と素く若策軍籍
 子暇とまじし軍兵指揮より時つぬ息を成せども年次下と
 ぶくも空く少果の修りとゆども常り軍快くして足るもな
 くらよ夢と懐こそ成始一海とあれと氣を去り日
 天才わると生んで又そ張巻用る人とせせだ日西よ能き
 多ゆり少影い少く深くうづもれ彼れと若肥馬り
 跨るく胸り一物あけきども囊よ餘る賞あり富りそ
 雲りけりを驚か涙よりの賞恩あるそ後と顛倒する天道
 松かーといえしや

むさしゆや切りども秋のそぞろさうあつ風のあつぬる所ん
 書しあつりてゆらるる教及依傍るん又右射一章と贈ま
 蘭草自能香生於大道傍 腰鎌九月 共在東薪中
 多しと心を著く地を以て詩飲と焚燭とあつと之れらぬす
 何るまじ天帝初らうあれば我り射して言何る金りら
 想少希釋ハもさう小庭して富屋とて刑籠とさじむ
 言能善所そく史画とさじし因果よふんく生と活しむと
 折心あつざらのゆと承り我生ゆ教直あつ富屋とあつ地
 有の決断と成さしめど善悪理非論被掃と須とて明白
 せしと指り言しとれり倚て脚る忽見る七八個のま面襟さ

とる鬼率机入り下より傍出く任を賜賜你いふ身入り方ありて
天と地と地とをむい今你ととくして國魔王の面より還去りて
你よりと聞かむる事さうし任を賜と尋て你が爲君公に
らん御と衆人入後殺と懼むや疎魂一濟り常より多と批
脚と批さる事さうとみく任を賜り強子奪しと捕りて是之れ
任を然相と味して焚りて焚りて成お遊神體糸て天上
と常より宣しと良玉帝たま想りあひ世人の壽福長五ハ氣
運の爲とむる不彼が子若れとく災あるものと後より不背
たりの下流りあり刀ありとの頭常才さとの遊及お終の地を
天下世とさる世の中は是地は偏か一彼若ん誠廣かは初て
天とむ速り飛と回て高徳の徹とさる時と太白令軍奏
しては地の地を言衆をれありとさるも此人刀もくして運

塞押機あふりさるては海あり善は福一徳は福さるたれ常
現あり彼が言不常と良玉帝宣し彼を爲傷若而能む
出つく刑恥と更さることさるハ相違ありと也同罹さるんまの故
とさるの職ありと也良玉帝宣し此れとく十殿の 圖君命と給さる
賜わらん彼若れの中よりありて二り文をさるると也令軍ま
善しと回彼はと善言と也必は日月ありとト友良玉帝宣し
見ると果して不常ありと善言ありと也良玉帝宣し
決せざるとのありて地獄中の惡亂立并て天庭と街くはが悪見
下修り時と任を賜と良玉帝宣しと也良玉帝宣し
勢しと地獄司の寛相公より彼とて批りせしめは地獄司の
時と切とせしと罪と懲し公明なることと也地獄司の
彼が知たは腹とせしと玉帝善言り此れ即令軍と地獄司は



英州氏前錦夫三

定て〜天に自然の推御ありて性多と云ふまゝありて是れ性
 なるもの眼々火の如く行移るものも如く火の胸の焦る如く
 人々遺棄物も施さるるあつたもさう無常人よ入地獄でさう
 ごとく常事と云ふ施と好むのい出る事多しきだも此中智
 一けきでも重罪の光りとしてせしめんとする恰も此と
 れど重きごとくハ智と云あるを佛も人せしめん事と云ふ一賢賢の
 老い子多く子多しき月家絶てて教子此中よ必と云と云
 そのも何れも重き如く全級の光りてせしめんとするは
 多くハ後嗣と云ふありあり平辨の花あふとのと云ぬく
 こそ花見事あるは定気ききと知らぬ〜是れハ一生の内事
 ずし法事あり其月々悪人悪業と云く子孫絶る者ハ
 悪報は後子孫子孫子孫と云く若く交て子孫の續ハ世ハ

善惡と知らぬ〜善人ありて貪欲ありハあけし性者して
 福田と稱さるる人必し餓窮の種と云ると知らぬ〜天の
 さんちと云りあねだるる久遠〜して徳報の運道あり
 人間より云々人々と御知らんや佛の教誨ハ久其力ガ
 人徳の存きより物多し〜任事云々無常法可報悪業と宣
 ども果して然らば先づ〜りの業を〜との〜〜〜我々看
 あつた〜富貴云々止す〜と云の首領の此圖理王位と
 六個の存修り修じの告と好く決断せしめ御めあつたは
 世に〜と云ん截判と云る事あり〜ハさう付く水く地獄に
 人衆と云ふは〜言死して悪業所産と起て後世よ入地獄と
 善く修業と云し〜見事平等計量報と云起て積累
 善〜と云ふ報と云ふ報と云ふ善惡の法自六善の法差別

英州宗前編卷之三

三

果して法司決御侍より何れも今おぼく判次しく一々明白
ありし乙と直日の鬼卒と喉で三通の苦状と一齋り喚出さ
しめ承る彼若按次よりあはびて懸審判官高聲に承告彼
若のちりやまふ

若人 安徳君在也

僅で回答す也

祓告 二位尼 在也

僅て回答す也

任重御と用て二位尼の印を小御て若入水せし心とてさき
をいふお徳君御て去朕平氏より身復せし西海より下りお氏
御い
あしく一敷海より渡せし内朕平氏に承りていしく承りて
けせし身あきだ無のまよ返りし心も今あてりしは二位の尼
腕より愛細と帯し梅察の房より腰と抱しめ水新屋よりあ
休居しあしとつひく海より入りこたえ人あき腰と己が死の連置

せし何れもぞあまつえ後乃の後より朕御賢礼門院の内は後
の女御りとうとまはれく又帝の御目からさるしは見え
ておししる腰ありと子心くこよ我と京登り海とせし海
内腰よせし中そ入水せしめしる飛と抱せしお徳君具足若者の御り
し御侍よりおしるあまづし多量の御終る若友と見えしお氏の御
と抱乙のあ傘浪法橋がみあるとつひしも是より回しつる
け寛殿と御て御身し任重云安徳君の云訊つておしる若
若くは河をうらむし我御あは外感法整のけしし安徳君の
お徳君の御りしはかうし男家の御終るし御侍よりおしるあま
人多くは御しよりてはか御あつるお氏の御終るし後世は後
お徳君の御りしはかお徳君の御あまはらん我とては若知あり
ひしこ御りしはか御りしはか

若人のりし事うつなむや

儘で日影よす

彼若くもしむありとむや

儘で日影よす

任事云義經が若く前理りあ事とさても休親久人種をまりに
 主殿の判官よりあはれ形朝は降せたり先達を位降りしむむ
 後より形朝の事とせりし時勢と云くよるは自然して國れと
 あり頼朝より多く親と西討せば形朝何ぞも之の情と想ふら
 ぬとあまうえし後云依ら後と斬て謀叛人の志と破し云こもて
 一流りゆらむと世と同姓より形朝とせしを平氏とぬきしときり
 てあはれよお遠しそり来と知らぬあり果終りと云都り形朝今こま
 ちて名と形入あらひいふ義經やて云あられ河あ某が若る文一
 種もて若らば一某合見と受服とさども父の骨肉は物きさか
 奥形り時とゆら度那の陣もそり又まきてより久の代友と

して範れと興り園外の校をこもり義仲とに開りこりしむ
 しきま成と西海は斬沈め家の焼と討ら國の親を同ふ新
 都り一在判して前めと法とえり業と母との面あはれ
 め物とも思ひぬむ切は後らぎやうらうと身と空るはさ那
 のゆはとゆくを卒と業し一修も武後の脚とありて云ト
 と櫻石のあさにかうしとあひの介久の心狭く熱追補使し心と
 脚しと軍とくは日も腰斬るを進りしゆら尚も大江屋え権
 京京事子あが言と種て去依ら後と若く業せ刺客は好しと云
 とい道も我あがり投つれし一某一時の横怒しうりて去依ら首
 と別よりそりしうりく鎌倉より取日よ大軍の定る用はの目
 乞もて味方と母のし後云の目も義經敵と成りしと云て
 我と見しそり路と人のいしく我徒若はかよ味方かきをさきよ

文治元年十一月二十日... 都を定む... 河原... 多田原... 大物... あれど... 後者... 有恩... とつ... 多勢... 擯使... の... と... 氏...

文治元年十一月二十日... 都を定む... 河原... 多田原... 大物... あれど... 後者... 有恩... とつ... 多勢... 擯使... の... と... 氏...

卷之三



英州前編卷之三



義経は其の性多うして人より親むる体なるとは種々人とて幾り
 其の辭あり是なり人の心は其の如くは一人の威勢は善ん
 りと處り征西の如く毎度極まり進りて和田島山の南河の大
 家能理守忠を將識多才親とて親辱とも多しぬ人ありぬお
 うとく睦友しぬ極景時ハ侍別高入所司軍士の意欲して
 武陽の舟人ありて大小の事皆承へ令せぬ馬房度付の
 時一族との合戦ういさ進くと心とぬと武陽より其の如く一
 夜も静過しぬ多し多しと進くと心とぬと武陽より其の如く一
 さへ其の如く三年の事射は進くと心とぬと武陽より其の如く一
 なる馬射子任せし進くと心とぬと武陽より其の如く一
 甚收むるは使志す射して作りのハ絶絶義信承ハ其の如く一
 より内養を以て受領は其の如く吹巻せし其の如く一

存る子細有りて未其如くは其の如く其の如く其の如く
 とるありて是とて其の如く其の如く其の如く其の如く
 何れも其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 未西海より在て其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 小事と怒りのありて其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 と其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 後白河院頼朝が権威と其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 ども西海の極端と其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

中途より入る路りそれごとくはゆれり 汗流るるに任せて義経
 がれど明向ある影はほいどる義経云余輩はの時洛より志鬼
 法眼とてそのありて深く法陽の理と學み備く軍籍の奥
 と後む人相と定あらず 勢ひは名何るに彼が相を求むるのには
 市とむとあて果と相して来七十一歳功名業考り流りと
 あり是れゆよ云はるはほせそ人の心は偽らば流り知らん事考流子
 義経は年二十一年彼冠一術極とて験をく虚名よ流りして
 人と嘆く一人の一生をあやまる恨屋しく任を鬼一と嘆で是れ
 同く鬼一云人れ果命延命あり折屋あり早學共流考り
 寿命の定難は是れあり義経七十一歳是れ其上の理の極なり
 かありきりる彼が機と殺しを深く法陽と横するより多きがゆ
 絶折とてん果命下の道より此を任を云義経幾件法陽と

折ふて云はる 鬼一云始義経奥州へ志し 陣の防員日入父
 下那の侍人深橋渡り女老を同休の物なり 其時合意人
 橋次と共進して前進して之河の虫矢俵とて十日中俵を
 矢をとり合ふなり 内宿の長が娘とかがいぬ秘の整りとあり
 更なり下那は若くして深橋の娘なり 年計なる内波かへあど
 けり初とてうくはひとりて終に消息を送るといふも義経馬
 耳風とて世に河の音はふありあはる一節なり 女は深く恨
 懐りて十年の月をむあしくなる 突如づらふ殺せしは義経十
 年と折く 壇の偏至軍敗ましく後如流の御船り 義経とて
 四母と犯しなる又十年と折ぶ 其母の死義と云はる却て久
 と退討の院宣とてとを乞ううめて又十年と折ぶ 将家の
 考りて免まざる事なづく 義経は討りて流るるに流るるに

戯るへ常なり女の男り戯るへ理の節よあらん心も忠義は
 人をもとく一時は海はゆと都へ戯る言とおもひ我もよせし
 走ゆりぬけあり一語後身言と托して其れの際と伺ひ之言忠
 云我海家より後やとぞも教万所と仰し大慶寺堂に食部衣
 西京乃美色後堂よ元何ぞ之候の若婦と慕りしや彼時中
 元見伊豆の流人少兼隆が徳と交て既り定つる父支有り
 ながう父時政を番らるるち内作後り定通一くが政中必
 して此と知りお彼屋の突へと帰り直り少兼が件へ送りつる
 一皮兼隆が件へ帰しこれども作後のもつと志をうめて少兼の徳と
 逃ゆり作後よ後志の探定らるる半かくのどく一を忠切りのを
 乃兼と後人乃通れ大概と知る義の志意程もふし任をり
 忠より不直徳政子が何れをぬり隠せしあつて必しと云ふは
 忠忠ハ大田の長息節比敷ふし是皆少兼が家より謀り而後代

少兼の云下とゆくこのふ方ち作小之人子其て生お汗馬の昔
 子被也へ一任守善徳のぬ刺友と譽て忠薄扱へしめ決り
 明白恩を思てぬて被ひ仇ハ仇とゆく被ひ介毫と銘んん
 連告の若までも一場子若着せし其何州何郡何郷何公廉のぬ托し
 作義時生れ義時死し細くと地縁して罪人一を去てまの
 胎子投せしむと一刺友を托て任をの言ふよ後て此為
 寫しとる任を云安由君ハ日本國公卿何郡公廉のぬ托し
 して廉子と稱し帝統と好て唯后より後身南朝の國
 とあぶし一と業園と引て義貞復良がぬよ害とをんん
 有る二位の危ハ是も西園寺家よ托し一實兼の女とま一家の
 先例よりて入内して后よ立座らんん廉子よ一和と集りれ



是人と怒るのありと一其の極小なるをめぐりての...
 云你情儀の智を悟らざれば人界より地人と云ふこと...
 其の程をかき極楽へ天考とも云ふ人の禮儀地のおよ...
 烟とありて空より升るをいと極小消化して天の空ありと...
 ちつて世にたまふおろくありと極楽も海にのち...
 此空を現世より朝一よりその...
 人もおろく人界へ生かされどもかくあり...
 ある末世の存無あることと思ひとりて...
 人も人界へ生かされどもかくあり...
 九死に生かして後て是と...
 佛に迷ふとありて空と一つに消化...

佛に迷ふとありて空と一つに消化...
 生かされどもかくあり...
 佛に迷ふとありて空と一つに消化...
 生かされどもかくあり...
 佛に迷ふとありて空と一つに消化...
 生かされどもかくあり...
 佛に迷ふとありて空と一つに消化...
 生かされどもかくあり...
 佛に迷ふとありて空と一つに消化...
 生かされどもかくあり...

と先ほどと異教とならまてハ陰陽相生と云ふ身も此皆地獄
あふりや任事も多と扱て終て地府の規矩と拜服一巳子齋
王は別と云一我舎のともと出つ机は忽然とくして衆と起
雙眼と穿らきて我の地府の事とて云れども奇怪くと福
言して隣家の翁と云んで夏の奇事と云うりやせが玉帝
乃令われバエーく延つりごとくと況強て目と瞑て逝と云ふ
定業もや隣家の翁と云んで其屋とあり近き林井と云ふ
幽霊の奇怪ありと云ども被救人の冤魂の云つる處
つくりのまらふハ強鬼の云ふ

古今奇談英草紙卷三終

